デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2026年（令和8年）10月29日（木曜日）（19）

# 八工大と八高専の学生17人挑戦

# IT活用 起業家育て

## 八戸市新事業 地域産業創出の契機に

ITなど最先端テクノロジーを活用する起業家の育成に向け、八戸市は本年度、新たな事業「HATCH TECH（ハッチテック）」を展開している。起業を目指す人材の発掘や成長する機会を提供することで、地域をけん引する新たな産業創出のきっかけとしたい考え。事業には八戸工業大と八戸高専から学生17人が参加。アイデアの具現化や、ビジネスプランとしての成立に向け挑戦を続けている。（藤村大地）

市は2016年に「はちのへ創業・事業承継サポートセンター（通称・8サポ）」を創設し、起業家育成に力を入れてきた。テーマごとに起業に向けた勉強会なども行い、着実に起業数は増加している。一方、業種別では飲食やサービスなどが多く、経済活動としては小規模なケースが多いという課題があった。

このため、地域経済に雇用などで高い効果が期待できる分野として、IT系などに着目。地域には八戸工業大や八戸高専といった高等教育機関があり、学生が注目度の高い研究を行ってきた事例がある。ビジネスの芽となるアイデアを持ち、起業への熱量の高い若手人材を育成しようと企画した。事業には本年度、5チームを採択。1チームには活動費が最大40万円を支給するほか、起業家の先輩や専門家のサポートなどを受けられるようにした。

10日、市内で全チームが集まる定例の作業会が開かれた。自作のロボットの技を競う「ロボコン」に携わる八戸高専5年の砂庭果実さん（19）と同2年の工藤大和さん（16）らのチームは、ロボット製作に必要な電源回路に注目。回路の基板に指示を行う部品をその都度パズルのように埋め込む「ジグソーパズル型汎用電源モジュール」の開発に取り組んでいた。

複雑な回路の設計負担を減らして、初心者が参入する負担を低減するのが目的。最終的には産業ロボットなどへの応用の可能性も見据える。砂庭さんは「アイデアを実現する機会をいただいた。完成に向けて頑張りたい」と意気込む。

市商工課の市川国昭課長は「起業家が育ち、ここから八戸に寄与してくれるような産業が生まれてくれればうれしい」と期待を寄せる。11月には各チームが進捗状況などを中間発表する予定。



意見を交わしながら、アイデアを形にする方法を模索する学生ら＝10日、八戸市

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。